

## 保育と社会福祉を漫画で学ぶ

### ⑤『花もて語れ その2』

迫 共  
(浜松学院大学)

朗読の漫画、片山ユキヲさんの『花もて語れ』について、引き続き書かせていただきます。保育現場では読み聞かせ、歌い聞かせ、素話など、保育者が乳幼児に物語を聞かせる取り組みが様々に行われています。『花もて語れ』に取り上げられる朗読の理論は保育表現の実践の場においても、参考になるものだと考えます。

「その時、私は『お母さん』と言った。」

主人公ハナの朗読の師匠、藤色きなりは「この文章を声に出して読んで」と言います(第1集より)。ハナは戸惑ってしまいます。情報が少なすぎるから「読めなくて正解」なのです。「その時」とは今か、過去か、未来か、それに「私」と「お母さん」の関係は…など考えると1万通り以上の読み方があるためです。

説得力のある朗読をするためには、作者が文章表現の細部にどのようなこだわりをもって言葉を配置したのかを読み込み、朗読者なりの理解を持つ必要があります。さらに作者がどのような時代背景のもとに生き、人生のどのようなタイミングで作品を書いたのかを知ること大きな手がかりとなります。

『花もて語れ』は朗読講師、東百道氏の朗読理論をもとに書かれた作品ですが、東氏は著書においてある友人の言葉を紹介しています。その方はピアニストのホロヴィッツが「楽譜に書かれていないことばかりやっている」と言ったそうです。クラシックの演奏者が楽譜を読み込むように、朗読者も作品を読み込んで「書かれていないことをやる」必要があります。クラシック音楽では同じ楽曲でも演奏家の作品理解によって様々な表現があります。朗読にも同じことが言えそうです。

文学作品は言葉だけで書かれていますが、読み手の想像を喚起して映像のようなイメージを引き出す「文章のカメラワーク」があります。

台詞以外の文章を「地の文」といいますが、その読み方には六種のカメラワークがあります。朗読者はそれぞれの視点をイメージの中で転換することで、聞き手にイメージを届ける

ことができます。

六種のカメラワークとは「作者が作品世界の外から」、「作者が作品世界の中に入って」、「作者が登場人物の心の中に入って」、「登場人物が作品世界の外で」、「登場人物が作品世界の中で」、「登場人物が自分自身の心の中で」というもので、これらに時間や場所、気持ちの変化が加わって視点は無限に増えていきます(第4集より)。

第10集では、主人公ハナが育ての親である伯母の家で、鈴木三重吉の『ぼっぼのお手帳』を朗読します。ハナは小学生のときに両親を亡くし、伯母に引き取られたのでした。声が小さく人間関係が苦手なハナの性格は、こうした幼少期の経験が影響しているのかもしれませんが。

さて『ぼっぼのお手帳』は作者である三重吉が、娘のすず子に語りかける物語ですが、一読しただけでは読み取りがたい謎をかかえた作品です。

冒頭を紹介しましょう。

「すず子のぼっぼは、二人とも小さな小さな赤い手帳をもっています。この二人は、『黒』よりもにゃんにゃんよりも、『君』よりも、だれよりも一ばん早くから、すず子のおあいてをしているのです。」…「にゃんにゃんや、黒が来たのは、ぼっぼに比べればずっと後のことです。にゃんにゃんは、すずちゃんが、やっとはいはいするころに、或おじちゃんをもって来て下さったのでした。黒は、たったこないだ、お家の犬になったばかりで、もとは、そこいらののら犬だったのです。そのつぎに、一ばんおしまい、君がおもりに来たのです。」

すず子は三重吉の娘、黒とにゃんにゃんは三重吉宅のペットだと推察できます。ぼっぼは二羽の鳩ですが、三重吉や母親と会話をします。現実には鳩は話せませんので、ぼっぼは玩具の鳩で、三重吉たちがお話ごっこをしているのだとハナは読み取ります。

では「君」とは誰なのでしょう。「君」は冒頭と末尾にだけ登場します。

「ぼっぼのお手帳」は三重吉が娘のすず子に、「君」が生まれる前からのお話をしている情景を、そのまま文章にした作品なのです。「君」とは自分のことをようやくわかり始めたすず子のこと。すず子が生まれる前の物語が、三重吉がすず子に語りかけている「今、ここ」に続いており、現実にいる三重吉や祖母はお話の世界にも生きています。すず子もお話のなかに「すず子」として登場し、現実の「君」として三重吉の語りを聞いています。2.3歳になったすず子はようやく三重吉の語りが理解できるようになり、また自分のことをおもりできるようになりました。だから「君」は「一ばんおしまい」にこの世界にきた、つまり「君」はすず子だったのだとハナは読み解きます。

この「作者が作品世界の中に入って」語っている設定それ自体が、「ぼっぼのお手帳」の前提となっており、そのことが読み取れないと理解できない構造になっています。漫画の表現は、三重吉の日常と物語世界が入れ子構造になっているこの作品を、よく説明しています。

作品を読みながらハナは「私は、私の『君』と二度会った」と振り返ります。最初の「君」には両親のもとで「きっと出会ったはず」。でも両親が亡くなり、ハナは伯母の家、つまり見知らぬ地にやってきました。ハナはつぶやきます。最初の「君」を失い「私は私が誰だかわからなくなった。だから私は、再び童話の世界に逃げ込んだ。お父さんとお母さんのいない世界で生きていく、二人目の『君』を見つけるために」…。そのことに気づいたのは、ハナの育ての親である伯母の前で、「ぼっぼのお手帳」を読んだからなのでしょう。

さて、このエッセイの筆者（迫）は保育者養成校の教員をしており、保育原理や保育者論を専門にしています。「ぼっぼのお手帳」のような作品は「児童文化」の授業で触れられることがあります。この科目そのものがあまり重要視されていないように思えてなりません。現場ですぐに役立つ保育の技術と比べると、趣味の世界のように捉えられてしまうでしょう。

しかし保育者に求められる心情は、たとえ明確な反応がなくても「君」のために語りかけ続け、ついにお話を理解できるようになった「君」との出会いを心から喜び、称えるような心もちではないかと考えます。子どもの心に響くお話の世界を伝えるのは保育者の大切な役割です。保育の技術や知識と同様に、子ども達の心が自由に開放されるお話の世界を大切に守っていかねなければならない。『花もて語れ』の朗読場面から、そんな思いを新たにしたのでした。



『花もて語れ』第10集 片山ユキヲ作（朗読原案：東 百道） 小学館,2013